

大分県学校図書館研究大会 第5分科会に参加して

得松昭行

11月11日、第45回大分県学校図書館研究大会（佐伯大会）に参加した。

10年前の宇佐大会以来の参加で懐かしかった。

所用で、全体会も記念講演も聞くことができず失礼したが、わずか1時間の第5分科会「司書の活動」でみなさんの真摯さと熱意を感じ、10人足らずの人しか発言できなかったが、それでも随分たくさんの方を学び、考えさせられることが多かった。

せっかくのよい機会だったのに、発表する時間がなかった、中途半端で消化不良だった、もっと交流し学びたかったのにと、残念だった人、不満足だった人が多かったのではないだろうか。

せっかく助言者の席に座らせていただいたのにほんの少ししか述べることができなかったのも、以下、分科会の印象、学校図書館のこと、学校司書のことについて、分科会で述べようと考えていたことをまとめてみることにした。

分科会の印象 課題のいくつかは見えてきた

由布市立庄内中学校の学校司書・安部千重美さんの発表で印象的だったのは、由布市が誕生することを十分ふまえて旧4町レベル（実際には3町合併）で学校図書館問題を考えていったということだ。

①合併前の他の町の学校図書館や読書活動推進の実態の違いを出し合い、課題を確かめ合いながら、よりよい方向を模索していたこと。

②学校司書と教員とが子どもの読書に関わることで、学び合い、魅力的な学校図書館づくりに向けて協働を始めていたこと。

それらは、資料の「はじめに」で「同じ郡内でも、勤務形態や蔵書・設備状況が異

なる中で、どのようにすれば子どもたちによりよい読書環境をつくることができるか取り組んできた」「平成14年度から大分県教育振興会で図書館教育部会の先生方といっしょに学習できることができた」などと、ゆっくりながら前進していることを記述の中から感じ取ることができる。

「挾間町立図書館と各学校がネットで繋がって、幅広く本を借りることができる」「（学校司書の）兼任校では、…」「校務員と司書の兼務で、…」「読み聞かせのポイントや選書について話し合った」などと、学校図書館と公共図書館の提携の問題、学校司書の職務や採用や身分の安定措置の問題、子どもを読書に親しませるためのスキルアップにいたるまで、幅の広い具体的な取り組みが報告されている。

柱を立てて質疑を受けたところ、学校司書の兼務・兼任の問題、選書や廃棄の問題、出張等における保障の問題、「教育振興会」の内容に関わることなど短時間ではまとめることのできない重い課題が出された。質問者と発表者との軽いキャッチボールに終わったのは、時間がなかったとはいえ残念だった。活発な議論が展開されそうな雰囲気だったのに惜しいことをした。

発表原稿も共同で作成し、発表者への質問にも庄内町での取り組みだけでなく、湯布院町ではこうだ、挾間町の方ではこうしていると返答していたのが印象的だった。

司会者の五十川信子さん（津久見第一中）から事前に発表要項のゲラを送ってもらったり何かと気配りをさせていただいて感謝している。発表者と司会者との呼吸も合っていた。だから、本当に短い時間だったものの、活発で無駄のない有効な分科会になった。

学校教育に絶対欠かせない学校図書館になっているのか

蔵書も、施設設備も貧弱なまま、雀の涙の予算で旧態依然の学校図書館。司書教諭も学校司書も置かないままの「人」のいない学校図書館。学習・情報センターとしての機能をまったく果たしていない学校図書館。利用したいときにはいつでも利用できるように開館していない学校図書館。残念だが、このような学校図書館がたくさんあることをこの大会に参加した人はだれでも知っている。

第45回大会の冊子にも、いくつかの実態が記載されている。

「現在の佐伯地区においては、専任の図書館司書は皆無であり、施設・設備内容面でも充実しているとはいえない状態です。しかし、近年、朝読書や読み聞かせに取り組む学校も増え、読書活動の大切さが見直されてきています。」(一次案内)

「30年位前から学校に司書が欲しいと、各小中学校 PTA が自力で司書を雇用し始めた。本校でも昭和45年から司書が入った。図書館担当の教諭と司書が協力しながら図書館を運営していく体制ができていることが、さまざまな取り組みを可能にしている。」(P82)

「司書がいることで、図書館がただ“本のあるところ”ではなく、心の通った温かい空間になり、子どもたちを「図書館に行きたい」という気持ちにさせている。図書館が“心のよりどころ”“ホッとする場所”にもなっている子どももいる。また、学習にあわせた図書購入、調べ学習の資料提供、図書館についての学習の協力などが可能となり、学習面でも図書館が大きな役割を果たしている。」(P83)

「図書室には司書がおり、子どもや教職員の相談や本の購入・管理全般をしてくれている。図書館運営は、司書、図書主任、図書委員会(5・6年生児童18名)が主となり行っている。」(P88)

佐伯市立小学校34校、中学校13校の学校図書館がP20からP66に各学校1ページをさいて紹介されている。学校図書館が誕生して50年以上が過ぎているのに、なぜこのような実態があるのか。

目をつぶってはいけけない、真剣に考えてみなければならない大きな問題がわれわれの学校現場にあることを見せてくれている。参加した分科会や関心のあるページだけでなく、大会資料全体の中からわれわれが真っ先にしなければならないことは何かを考えていただきたい。

貧弱なまま放置しておいてよいのか

「今のままでよいはずはない」「現状に目をつぶってはいけけない」「子どもの読書活動推進法ができ、大分県子ども読書推進計画も推進されているのだから、みんなで学習し運動を活発していかなば」「今年7月には文字・活字文化振興法が成立し、“司書教諭及び学校図書館に関する業務を担当するその他の職員の充実等の人的体制の整備、学校図書館の図書館資料の充実及び情報化の推進等物的整備等に必要な施策を講ずるものとする”と謳っている。追い風を生かしていこう」「学校図書館図書整備計画による地方交付税がわが校の図書整備に使われているかどうか、まずそのことを確かめなければ」

残念ながら、このような声を学校図書館関係者から聞くことはまれである。

そして、貧弱なまま学校図書館の役割をほとんど果たしていないことに目をつぶったまま、「子どもの読書活動を活発にしよう」「子どもの読書環境の整備に取り組もう」「図書館ボランティアよ力を貸してほしい」「読み聞かせやブックトークなどで本好きな子に育てよう」「朝の読書で本校でも読書離れが解消に向かっている」などと言っていてよいのだろうか。

深刻な状況を直視し、現状を変えていく具体的な方策を真剣に考えずにいて、子どもの読書活動の推進はできないと思う。

二極分解はどんどん進行しているの に

OECD (2001) の調査によれば、「趣味として読書をしない」子どもの平均 32%に対して、日本の子どもは 55%で 32 か国中最低だった。最近の読書調査によれば、朝の読書の広がりなどにより数字の上では不読者は減少しているが、子どもの読書離れは減っているとはいえない。読書離れと勉強嫌いの子どもは増えている。このまま「本も読まない、勉強もしない国・日本」になってしまうのか。本を読む子に育てることは緊急で大きな課題であるはずだ。ところが、

本を読む子、本の大好きな子 — 本を読まない子、本を好きになれない子
の二極分解現象が起きている。この現象の原因の一つが不十分な図書館資料と子どもと本をつなぐ専門の人がいない学校図書館にあると言っても言い過ぎではない。さらに、

学校司書・司書教諭・ボランティア活動をする人がいる学校図書館 — 全くそれらの「人」がいない学校図書館
といった二極分解が、本を読まない、勉強もしない児童生徒の増加に拍車をかけていることは間違いない。これらの現象は遠いところではなく、われわれの学校で生じている。

学校図書館法を改正して、附則に「司書教諭の設置の特例」を入れるのに 40 年以上を要する国にしてしまったのは、他ならぬわれわれである。司書教諭も学校司書もない二極の端っこの学校の教職員や保護者が、学校図書館に「人」が欠かせないことをどのくらい実感しているのだろうか。

子どもの二極分解に歯止めをかけるためには日常的な熱心な読書指導だけでは不十分である。学校図書館を変えなければ二極分解にストップはかからない。学校図書館が、真に「教育課程の展開に寄与し、児童生徒の健全な教養を育成するための学校の

設備」として機能するように全力を傾けたものである。

2006 年夏の第 3 回研修会に参加しよう

ここで「第 3 回子どもの読書活動推進研修会」のおさそい (PR) をさせていただきます。この研修会は来夏 8 月初めに別府大学大分キャンパスで開かれる予定。子どもの読書推進に関わっておられる方が一人でも多く参加して、学び、交流し、今何に力を入れて取り組むかを確認しあう研修会にしたいと考えています。

この『ジャントー・クラブ』にも紹介していますように、第 1 回・2 回の会には、幼小中高の教諭・司書教諭、保育士、学校司書、図書館員、ボランティア活動をしている人、主婦、学生などが集まってくださいました。第 2 回研修会の内容や感想・要望などをぜひお読みくださって、会の意図するところをお汲み取りの上、仲間や友人を誘ってご参加ください。

「子どもの読書活動推進に関する基本的な計画」には次のように述べられています。

学校等における読書活動の推進について
ア 子どもの読書活動の推進における学校の役割
イ 児童生徒の読書習慣の確立・読書指導の充実
ウ 家庭・地域との連携による読書活動の推進
エ 学校関係者の意識の高揚
オ 障害のある子どもの読書活動の推進
カ 幼稚園や保育所における子どもの読書活動の推進

これら抽象的な文言 (もんごん) を具現化するために何をしなければならぬか、何ができるか、交流し、知恵を出し合う会にしたいのです。みなさん、お待ちしております。